

日本の音楽教育へのリトミック導入の経緯

—小林宗作、天野蝶、板野平の関わりを中心に—

11SK1002 板野晴子

<要旨>

エミール・ジャック＝ダルクローズのリトミックは、スイスを初めとして、ドイツ、フランス、イタリア等、世界に広まり、音楽のみならず舞踊の分野においても高く評価され、日本にも導入された音楽教育法である。

我が国に初めてリトミックが紹介されたのは1903（明治40）年である。初期の紹介はリトミックの身体運動の方法に着目した演劇人、歌舞伎役者、舞踊者らによるものであった。リトミックが音楽教育法として本格的に我が国に導入されたのは、小林宗作によって幼稚園、小学校における活動が試みられた大正から昭和初期にかけてと、天野蝶による「天野式リトミック」が紹介された昭和20年代以降、さらにアメリカで足掛け5年のリトミック留学を終え帰国した板野による昭和30年代以降である。本研究は音楽教育としての我が国へのリトミック導入の在り様全体を俯瞰するために、彼らの取り組みとその役割を並列して検討したものである。

第1章 リトミックの紹介者“小林宗作”

本章では小林宗作（1893-1963）と新渡戸稲造（1862-1933）の関わりに注目した。また、小林の「総合リズム教育概論」に見るリトミック観を考察した。

第1節 小林宗作によるリトミック導入と新渡戸稲造による示唆

小林は1911（明治44年）年より小学校の教員をしていたが、当時の音楽教育のありように疑問をもち、西欧の音楽教育法を見聞するために渡欧した。その際、ジュネーヴで国際連盟の事務次長の任にあった新渡戸からリトミックについての示唆を受けたとされている。新渡戸を訪ねる訪問者らはジュネーヴの国際連盟事務局に出向いており、小林も同様に国際連盟事務局に新渡戸を訪ねたと想定できる。新渡戸の家族がジュネーヴでJ＝ダルクローズからリトミックを学んでいたこと、新渡戸自身もリトミックに関心を寄せていたことが明らかになった。また、新渡戸の音楽教育観にはカール・ビューヒャーのリズム論を見出すことができ、彼の述べる教育の目的の中には音楽教育の重要性が示唆されていることも明確にできた。その重要性とは、音楽が人格形成に寄与するというものである。小林が新渡戸から紹介され、結果的にリトミックを学ぶ決意をしたのもこの教育理念に納得

したからであろう。人格形成を目指す音楽教育法を日本でも実践することが肝要であるということが、小林へ与えられた新渡戸からの示唆であった。新渡戸は音楽教師である小林にリトミックを紹介することにより、日本におけるリトミックの移入史上重要な役割を果たし、リトミックが音楽教育法として普及する結果へと導いたのである。

第2節 小林宗作の提唱した総合リズム教育

小林は「総合リズム教育概論」を著し、リトミックといくつかのリズム教育論をその著書の中で紹介している。小林がJ=ダルクローズの周辺のリズム論を考察することにより、むしろJ=ダルクローズの論理に立ち戻っているということを指摘した。

第2章 リトミックの普及者“天野蝶”

本章では、日本へのリトミック導入に関わる人物の中から、パリのダルクローズ学校で1931年から1年間リトミックを学び帰国した天野蝶（1891-1979）に着目した。

第1節 天野蝶による日本へのリトミック導入に関する一考察

天野は当時の日本の体育教育の現状に合わせて、J=ダルクローズのリトミックをもとに「天野式リトミック」を案出した。J=ダルクローズのリトミックの内容と天野によるリトミックとの関係性に注目し、項目ごとに内容を比較検討した。その結果をもとに、「天野式テクニック」、「天野式リトミック」、「プラスチック」、「幼児リトミック（天野式）」の教育内容の変遷とその指導法の位置づけを明確にした。

第2節 天野蝶による子どもの歌と動きについての一考察

本節では天野の教材の中から子どもの歌とその動きについて着目した。教本『子どもの歌と遊戯』の中から抽出した、天野による作詞、作曲、振付のオリジナル曲を、J=ダルクローズの *Chansons d'enfants* に収められた子どもの歌と動きと比較した。J=ダルクローズの作品は和音進行や伴奏形の複雑さ、複合拍子や変拍子はあるものの、歌いながら動いている子どもが混乱をしない程度に使用されている。全ての曲が12小節ほどで完結している天野の作品と大きく異なるのは、50小節以上にもわたる曲中で劇のようにストーリーが展開され、それに合わせた配役ごとの動きが、集団とグループに分かれてつけられていること等、異なる部分もいくつか見受けられることを提示した。天野とJ=ダルクローズは子どもの「運動—触覚知覚、空間感覚・旋回感覚」を整備し、精神と身体を調和させることを目指すリトミックの一方法として、歌と動きを融合した活動を用いたといえる。

第3章 リトミックの理論の探究者“板野平”

小林宗作によるリトミック導入とは若干年代を後にするが、音楽教育界においてリトミック教育を大きく推進した人物、板野平（1928-2009）が渡米する前の状況に着目した。

第1節 ヒロシマからのリトミック留学生派遣の経緯について

広島で被爆した牧師の谷本清（1909-1986）は、日本および海外でも評価されている平和活動「ノーモアヒロシマズ」の提唱者である。今回の調査により、谷本がアメリカへのリトミック留学生を派遣するにあたっての経緯を、16冊に及ぶアメリカ巡回講演日記に残していたことが分かった。谷本が広島からアメリカへリトミックの留学生を派遣した経緯とそれに関わる人物の役割を調査し、その結果、谷本の熱意に同調したアメリカ人達、広島の音楽教育者である太田司朗ら、それぞれの果たした役割を浮き彫りにした。

第2節 広島の音楽教師によるリトミック導入

太田司朗（1904-1989）は国内に留まりながら西洋の音楽教育に関心を示し、明治期から大正、昭和にかけてのリトミック移入に関わった。太田は当時布かれていた学制の下での音楽教育には、身体運動を通して音楽を学ぶ機会が無いことを指摘している。小林が渡欧して初めてリトミックを知った年と、太田が広島の地で初めてリトミックを知った年と、どちらも同年の1923（大正12）年であることが明確になった。これまでは、我が国においてリトミックを音楽教育として紹介した人物は小林宗作である、という認識がなされてきたが、本人の述べるところによるならば、太田は小林の実践に先行していたことになる。

第3節 板野平による日本へのリトミック導入に関する一考察

板野は戦後の日本におけるリトミックの普及に貢献した。とりわけ、リトミック理論の探究に言及した音楽教育家である。板野はニューヨーク・ダルクローズ音楽学校を1956年に卒業し、帰国直後より学校教育に目を向け、日本の学校教育におけるリトミック実践を意識していた。全日本リトミック音楽教育研究会の会報「音楽と動き」には1981年から「学校音楽教育改革論 ダルクローズの思想をめぐって」と題する板野の文章が連載されている。板野がこの原稿の執筆にあたって、テーマとして選択したJ=ダルクローズの論文集『リズムと音楽と教育』に所収の「学校音楽教育改革論」は、*Unessai de réformede l'enseignement musical dans les écoles* という原題で本としても出版された重要な論文である。この論文を基に記された板野による連載「学校音楽教育改革論 ダルクローズの思想をめぐって」について焦点をあてて、その記述から板野がJ=ダルクローズのリトミックに関してどのような見解を持っていたのか、また、板野自身のリトミック観はどの

ようなものであったのかを明らかにした。

板野の「学校音楽教育改革論 ダルクローズの思想をめぐって」の記述には、J=ダルクローズが「学校音楽教育改革論」で論じている音楽教育のありようと日本の音楽教育とを対比させ、リトミックの技術・方法論のみではなく、我が国における音楽教育の課題を捉え、改革を試みようとしていたことが明確に顕れていることが判った。J=ダルクローズの述べる教育理念は、今までの技術・技巧中心の日本の音楽教育にはまだ浸透しておらず、この部分がJ=ダルクローズによって示されたことを、板野は強調している。連載の記述全体を通して、板野独自の案、私見を強く打ち出している箇所は多くはない。あくまでJ=ダルクローズの思想を忠実に浮き彫りにしていくものであった。

終章 リトミック導入史における3者の果たした役割

本研究は音楽教育としてのリトミックを日本に導入した小林、天野、板野の3者の関係者からの聴き取り調査を中心に行った。これまでリトミックはその方法論が多く取り上げられ検討されてきたが、本論によって“リトミックの紹介者”小林宗作、“リトミックの普及者”天野蝶、“リトミックの理念の探究者”板野平、という彼らの果たした役割と業績を明確にし、俯瞰したことは、大きな意義をもつものであると言える。